

二人だけの遠足

K先生が退職される時、かつての子供たちが文集を作りました。その前書きで、次のように述べています。

「私たちにとって、『K先生と7組の思い出』ほど貴重なものはありません。幼い時のたった3年間のことなのに、手のかかる私たち55名を、こんなに温かくまとまらせてしまった秘密は何なのか、探りたい気持ちでいっぱいでした。」

文集には、K先生ご自身も、「2つの人生の賭け」として、次のように書かれています。

「1つ目の賭けは、家が貧しくて女学校に行けず工場に働きに出た。でも、小学生からの夢は、小学校の教師になることだったので、2年余り働いた工場を辞め、編入試験を受けた。無事、教員養成を経て母校の国民学校に勤めることができた。」

「もう1つの賭けは、母としての賭けで、『勉強しなさい』と一度も言わずに我が子を育て、人並みに仕事をもって自立させることであった。でも、意に反して息子は身体が弱く、いくつもの病気をし、学校の出席日数は年間半分、早退は無数、遠足は6年間に1回だけ参加という状況で、方針を変え、勉強を教えてやりたい気持ちが大波のように押し寄せてきた。しかし、心を鬼にして、弱い子が一人で生きていけるために要となることだけを教えた。現在、人並みに世の中へ出て働くかせてもらっているのは、小学校から大学までの先生方の並々ならぬご苦労と純粋なご指導のお陰と、心から感謝している。」

先生が1年生担任の時、春の遠足に風邪で行けなかったA君のために、病気が治ってからA君と「二人だけの遠足」を実行されたことがあります。そのことは、当時、誰も知らなかったのですが、小学校の卒業文集に、A君がその時の嬉しかったことを書きました。それを知った誰もが声を上げ感動しました。

K先生にとって、教師は、天職と呼ぶにふさわしい仕事だったのだと思います。

先生が退職されて30年になりますが、今も、多くの卒業生が先生を慕って訪ねて行きます。そして、元気をもらって帰ってきます。